

何をしたいか自分で考え、選び、調べながら 個々のペースで、演奏やDTMを学ぶ

生徒一人ひとりが自分のレベルに合わせて、自ら考え、自ら選び、自ら学ぶ。
ICTも活用し、そのように生徒主体で音楽を学んでいくことに取り組まれている実践をご紹介します。



どうしたい？
と生徒にいつも
訊いています



今号の先生

音楽 能島秀邦先生

大学を卒業後、小学校の非常勤講師を経て、高校の教員に。音楽の授業へのICT活用の研究に積極的に取り組む。その実績から2021年度にHYOGOスクールエバンジェリスト(音楽分野)に任命され、研修講師を務めるなど、兵庫県内の教員養成にも貢献している。合唱部顧問。

生徒に対する想い

**義務感から抜け出し
楽しむなかで成長してほしい**

兵庫県立北須磨高校は、2002年に単位制高校に改編し、以来、次の言葉を学校のモットーとして掲げ続けてきた。

「自ら考え、自ら選び、自ら学ぶ」

同校で音楽を教える能島秀邦先生は、生徒に対してまさにそんな「自分の軸」をもつてほしい、と望んでいる。

「本校の生徒はおとなしめで、課されたことに『義務感から取り組む』という発想になりがちです。すると気になるのは、誰かと比べて上か下か、平均より上か下かといった相対的なことで、本当のところ自分はどうしたかったのかを見失います。人より劣ると感じて楽しめなくなったり、もっと高みに行けるのに目指さなくなったり。だから音楽においても、社会生活全般においても、『私はこれをしたい』からスタートしてほしいです。目の前のものごとに対して、何をしたいかを自分で考え、選び取り、学んでいく。そうすると、自分のやりたいことだから『楽しい』と思えるし、『もっと知りたい』『うまくなりたい』という意欲も湧き、力を発揮できます。義務と感じると、成長は止まる。そう思っています」

音楽のことや生活に必要なことを卒業後も自ら学べるよう、ICTを活用して自分で調べる力も伸ばそうとしている。「ネットやコンピュータを使いこなすこと

授業の実践

**自分で調べてやってみる学習で
自由に突き抜けることを促す**

能島先生は、以前から音楽の授業にICTを使っていたが、2022年度に同校に1人1台タブレットの学習環境が整ったことで、その流れを加速させている。

例えばある日の1年生のギターの授業。まず行ったのはリズム取りだ。能島先生が手を叩く。タン、タン、タツ、タタン。生徒はそれを数回聴き、一緒に手を叩いてみてから、おのおのが手元のタブレットに「感じ取ったリズム」を手書きの音符で記録する。四分音符や八分音符、八分休符。リズム当てのゲームのなかで、音符を使いながら学ぶ仕掛けだ。正解はタブレットに即時配信され、間違った人は手を挙げる。間違っ生徒がいる限り、次回も同レベルのリズム取りを行い、全員正解したらレベルを上げていくそうだ。

次いでギター演奏の練習に入る。弾くための基礎は前回までに一通り学んだ。各弦の音程を調整するチューニング。指

は、昔で言う読み書きそろばんと同じくらい、今や『できないと本人が困る』ものだと思います。自分で情報を集め、それが信用できるかも自分で判断し、情報を活用できるようになってほしいです。そうすれば、音楽も『またやりたい』と思うときに、自分で学べますから」



タブレットを活用した練習。教材を見る生徒もいれば、お手本の動画をネットで見つけ参考になっている生徒もいた。

図1 ギターの学習の評価規準

高	「自分で探してきた曲」を皆の前で表情豊かに弾き語りができる
	「自分で探してきた曲」を弾き語りができる
	「配布された曲」を工夫したストローク、アルペジオで表情豊かに弾き語りができる
	「配布された曲」を工夫したストローク、アルペジオで演奏できる
	「配布された曲」をストロークで演奏できる
	「配布された曲」をコード変更ごとのストロークでスムーズに演奏できる
低	「配布された曲」をストロークで止まりながらも演奏できる
	簡単なコード進行なら、ストロークで演奏できる

この評価規準を生徒にも明示。高度な技法を身につけたほうが評価は高まるわけだが、それ以上に、力量に合わせて「どんな曲を弾きたいか」を自分で考えて探す、という姿勢を評価することを打ち出している。



DTMによる作曲。授業後の休み時間には、制作途中の楽曲を生徒同士で聴き合う姿も見られた。

で弦を押さえて簡単なコード（和音）を鳴らすやり方。「ジャツ、ジャツ」ジャカジャカなどリズムよく弦をかき鳴らすストローク。習ったコードとストロークで演奏に挑むための例題曲の配布。ここまでの学習のオリジナル教材はタブレットでいつでも見返せるので、それぞれの生徒が自分のペースで練習を進めていく。

また、タブレットを使い、動画サイトなどでギターの弾き方を調べ、高度な技法に挑戦したり、基礎を固めたりしてもいい。例題曲のほかに、弾きたい曲を自分で探してきて、それを練習するのも大歓迎だという。単元の最後には確認テストを行うのだが、図1のように評価規準でもその点を明確に打ち出しているのだ。

「例題曲以上に簡単なコードだけで弾ける曲もありますし、腕に自信があれば好きな曲に挑んだほうが評価も高まります。自分で考えて調べてやったほうが得をするよ、というのが基本方針ですね」

同僚の先生INTERVIEW

生徒の自主性を伸ばすようなICTの活用を

能島先生とは、僕が音楽室に向かい行ったり、他愛もないことから、授業のことや生徒のことまで、普段からざっばらんに話しています。やらされることに慣れた生徒の意識をどうすれば変えられるだろう。ICTの導入は進めたいけれど、あくまでもツールであり、生徒の自主性を伸ばせる使い方にしたいよね、などといったように。

能島先生は、物腰は柔らかいけれど、芯が強く、まったくぶれないんです。生徒が自分で考え、楽しく学べる授業をいつも目指されている。そのための生徒への声のかけ方や、接し方を、僕も学ばせてもらっています。



理科
香川知慶先生

ICTをみんなが発想ゆたかに使えるように

能島先生はコンピュータに堪能なので、情報科の教員として学校のネットワーク環境の相談にのっていただいています。これまで私は、ICTの運用ルールはきっちりと決めておきたいほうだったのですが、能島先生から「ルールはゆるいほうが、生徒も、先生方も、いろいろな発想が浮かぶんじゃないか」というご意見をいただいたんですね。実際にそうしてみたら、生徒は上手に使い、先生方の工夫も増えて、私が勉強になりました。能島先生はすごく気さくで、温かい雰囲気なので、生徒も教員も、本音を出して相談しやすい方なのだと感じています。



情報
馬場友佳子先生

コンピュータと音楽編集ソフトによる創作、いわゆるDTM（Desk Top Music）も、2020年から授業で行っている。

「曲づくりはドラムパターン、コード、ベース、メロディの順で考えるとやりやすいよ」と説明。まずは音楽編集ソフトを生徒にさわってもらおう。使い方はドラムの入力方法だけ教え、あとは「ネットで調べてみたら」と促す。各自が調べ、生徒同士でも教え合って制作を進めるが、同じリズムパターンを手作業で何度も入力するなど、非効率なことも起きる。見計らって「ごめん、忘れていた、入力したものはコピーもできるよ」と伝える。生徒からは「はよ言うてよー」の声があがるが、「でも自分で調べてそうしていた人もいたよ」と茶目ついたらぶり返す。

「人から教わっただけのことはすぐ忘れますが、『困った』『面倒くさい』と感じて自分で考えて調べて解決したことは頭に残ります（笑）。しかも、アナログの作曲は理論をしっかりと学ばないと手を出せませんが、デジタルの作曲はその場で音を鳴らせるので、『試行錯誤』と『理論の学習』を同時並行で進められるのです」

自分の曲ができてくると、生徒の目の色も変わってくる。ほかにどんなことができるのか。何をどうやって調べればいいのか。理論ももつと知りたい。

「興味をもったことは、授業中に自分でどんどん開拓してほしいんですよ。それを教員は『勝手なことをしやがって』と捉えるのではなく、『どこまで突き抜けるか』という目線で見守れたらと思っています」

北須磨高校（兵庫・県立）



School Data

単位制普通科／1972年創立
生徒数（2022年度）707人（男子314人・女子393人）
進路状況（2021年度）
大学210人・専門学校／各種学校6人
その他18人
〒654-0142 神戸市須磨区友が丘9丁目23番
TEL 078-792-7661
URL <https://dmzcms.hyogo-c.ed.jp/kitasuma-hs/NC3/>

Outline

「自ら考え、自ら選び、自ら学ぶ」という理念のもとに、進学をサポートすることを謳う。2002年に単位制に改編されるにあたり、当時の教職員で定めた方針で、選択科目を拡大し、ガイダンス機能を充実させ、生徒が将来を見据えて主体的に科目選択・進路選択できるよう促している。1年次は全員がほぼ共通の科目を履修するが、入学当初より科目選択・進路選択のガイダンスも始まり、2年次から個々の進路希望に応じて科目を選択し、時間割を組んでいく。

生徒が自ら考え、行動する学校を目指して

能島先生がガイダンス部の部長だったときに、副部長として一緒に、「生徒が自分で考えて動けるようにしたい」という思いにふれてきました。そしてオープン・ハイスクールの活動や、コロナ禍における合唱部の活動などで、自分の意思で生き生きと動く生徒の姿を見させていただき、感銘を受けました。ただ、この点もぜひ強調したいのですが、普段からそんなに真面目な話ばかりしている先生ではないんですよ(笑)。食べ物が好きで、いつも人との笑い声に包まれている先生です。



進路指導部長
藤後泰典先生

単位制高校として掲げた理念を継承したい

能島先生とガイダンス部で共に活動し、今はバトンを受け継ぎ、私が部長を務めています。単位制である本校は、生徒が自分で科目を選択して時間割を作ります。その際に、「生徒が自分で考えるところから出発し、主体的に科目を選択し、意欲的に学ぶ」ことができるよう、学校として支援することを能島先生は大事にされていました。



ガイダンス部 部長
渡部知也先生

私もまた、本校の理念である「自ら考え、自ら選び、自ら学ぶ」という文化を大事にして、さらに発展させていくことができたいと思っています。

図2 ICTでやり取りする音楽鑑賞

課題(授業で解説します)

次の2曲を聴いて、曲の仕組みの違いについて考えて送ってください。
A.ビゼー「カルメン」序曲(前奏曲)／B.バッハ「小フーガ短調」
楽器、長調短調、明るい暗い以外で教えてください。

音楽鑑賞は、能島先生が課題を配信し、生徒が音楽を聴いたうえでオンラインで回答するというスタイルで実施。課題を考えることで音楽の理論や歴史を学べるようにしている。



HINT & TIPS

1 やることを生徒が選べる課題で
下は支え、上は突き抜けるように促す

ギターの授業で、弦を押さえてコード(和音)を鳴らすときは、できた生徒からテンポを早める挑戦を促す。また、例題曲には、難しいコードがなく初心者でも弾きやすいものを用意し、一方で、難しい曲を弾いてみたい生徒が自ら曲を探すことも歓迎。授業中は巡回し、各生徒の進度に合わせてフォローを入れる。

2 段階的にできるようになる過程を研究
誰もが成功体験を味わえる授業を目指す

ギターの授業では、指の押さえ方が難しいコード(和音)についても、簡易的な押さえ方からステップを踏めばできるようになる手法を紹介。音楽を学ぶにあたり躓きやすいポイントについては、段階的に身につけるやり方を研究し、レクチャーしている。全員に「できた」という感覚をもたらしたいからだ。

3 困る機会や調べると得るする機会を演出
自分で考えて乗り越える主体的な学びへ

段階的に上達する方法はレクチャーしても、演奏のコツやDTMを効率的に進める手法などは、あえて詳しく教えないことも。能島先生の授業は、ネットの活用も生徒同士の相談もOKであり、困ったときこそ自分たちで考えて、調べて、乗り越えてほしいからだ。そのスキルは社会生活全般で生きると考えている。

4 デジタルの良さとアナログの良さを
授業の目的に応じて使い分ける

デジタル情報は一斉配信や見返すことがしやすいので、全体説明に使うと、アナログ情報より時間短縮できる。また、デジタル情報は検索や加工がしやすいので、試行錯誤して作曲や演奏を学ぶのにも向く。一方、アナログ情報は空気の振動を含めて五感に響くもの。だからこそ演奏の発表はアナログで行う。

授業ができるまで

特別活動や部活動の経験も
音楽の授業に生かして

能島先生の音楽の出発点は「ピアノを弾いてみたい」と思ったことだ。親に1年近く頼み込み、中学2年生から教室に通った。スポーツも好きで高校ではラグビーにも打ち込んだが、このころには「この先もずっとピアノを弾きたらいいな」と思うようになる。だから、それが可能な職業として音楽教師を志望した。

大学の教育学部を卒業し、教師となり、夢は叶った。しかし、生徒との関わりでは、特に20代から40代にかけては「難しいなあ」と感じていたという。

「はじめは『教えよう』『歌わせよう』という授業をしていたので、生徒たちがどうしても受け身になっていたのです」

そこから今のようにな生徒主体の授業に、一気に転換できたわけではなかった。

「授業の進め方で『これは良くないな』と気づいたことを少しずつ変えていき、その積み重ねで、10年ぐらい前からようやく肩の力が抜けてきて、生徒と一緒に授業を楽しめるようになりました」

勤務した学校でのさまざまな経験が、音楽の授業に生かされた面もあった。

前任校では海外の修学旅行に同行。意思表示しなければ何も伝わらない環境下で、日本にいるときよりも自分を出せるようになった生徒の姿に驚かされた。

テクノロジーを活用して
音楽の学びの可能性を広げる

DTMを学習に初めて取り入れたのは、2010年代前半のこと。総合的な学習の時間に「音楽・美術・書道」の教科横断の取組として、音楽と映像と文字を組み合わせた作品を作ることになり、無料の音楽編集ソフトを導入した。創造性を育め、曲づくりを通して生徒が音楽理論まで学ぼうとすることに気づき、音楽の授業にも生かすことを決めた。

2020年からのコロナ禍にも、休校前からいち早く対応。図2のような音楽鑑賞の課題をオンラインで生徒とやりとりする体制を整え、以降も改善を重ね、現在も授業や課題学習にフル活用している。

生徒はこう変わる

「やりたいことができた」
その体験が次の一歩につながる

能島先生は自身の授業を顧みるために、良かった点や改善点を生徒に尋ねるアンケートも行っている。そこで集まったコメントには次のようなものも多く、もともと音楽が得意だった生徒も、そうではなかった生徒も、どちらも楽しめた授業だったことがうかがえる。

「想像していたよりも深く楽しく音楽と関わることができて良かったです」

「あんまり音楽が得意でなくてもいいけるように工夫されていた」

「どうすれば上手にできるか自分たちで考えながらできる」

「自由が多くて、楽しんでできる」

「みんなが楽しめる」

年間の授業のしめくくりには、全員向



音楽のことからICTのことまで、生徒同士で教え合って学ぶという、能島先生の授業の特徴。

生徒INTERVIEW

やりたいようにやらせてくれたから 自分で考えて行動し、壁を越えられた

安澤「中学校では、音楽の授業は課題曲をみんなで同じスピードでやりましたが、能島先生の授業は、自由度が高いんです。自分で選んだ曲をそれぞれのペースで進めてよくて、やりたいようにやらせてくれました。最初のうちはできないことも、工夫すればできるようになることを経験できたと思います」

平嶋「1年生の最後には、自由参加で、みんなの前で自分のやりたいこと、歌でも演奏でも何でも発表できる機会があるんです。私はピアノを弾いたのですが、自分の意思で前に出ることってあまりないですし、印象に残っています。主体性が問われる授業だったので、自分で考えて動く力がついたと思います」

上野「オンラインで提出する課題もあるんですが、能島先生はうるさく言わず、出したものはこう評価をするので、あとは自分でどうするか考えてやってね、という感じなんです。考えて行動することとか、自主的に調べたり教え合ったりすることとか、社会で求められることまで教わったように思います」



左より、3年生の安澤愛彩さん、平嶋愛音さん、2年生の上野隼空さん、1年生の川田流成さん

川田「生徒それぞれのレベルを見てくれるし、DTMの授業は音楽を習っている人もそうでない人も楽しく作曲できたし、誰も取り残さずに、一人ひとりが自分の力量に合わせて学べる授業です。僕は陸上部なのですが、自分で目標を置いてがんばることは、スポーツにも勉強にも役立つと感じています」

けの合唱の課題とは別に、「やらなくてもいい自由課題」として、楽曲も表現手段もすべて自分で決めてみんなの前で発表できる機会も設定。2〜5割の生徒が参加するそうで、自分がやりたいと思った表現の練習に打ち込んでいく。

高校で音楽の授業を選択したことをきっかけに、在学中からDTMの作曲にのめりこむような生徒もいる。また、卒業してから「大学で軽音楽部に入った」「合唱部に入った」「ギターを買った」「音楽鑑賞が趣味になった」と報告してくれる生徒もいる。そのように、本人が「音楽でこんなことをしたい」と思ったときに、自分から動き出したような話を聞くと、能島先生は嬉しくなるそうだ。

「音楽にとどまらないことですが、進学先でも、あるいは働き始めてからも、自分は何を勉強したいのか、どういう生活をしたのか、自分の軸を大事にしながら、そこに向かって挑戦していくことを応援したいです。そのときに、やりたいことに一歩踏み出そうとする自分を支えてくれるのは、過去の成功体験だと思うのです。『こうした』と思ったときに『自分で考えてやってみたらできた』という。その1個1個の成功体験が、次のステップを作っていくはずなので、音楽の授業や学校行事を通して、困ったり失敗したりもしながら最後にはやりたいことを自分で成し遂げる、ということをも、一つでも多く体験してほしいと思っています」



思い描いている授業のあり方

目指す生徒像

- ・何を勉強したいか、どんな生活をしたいか、自ら考え、自ら選び、自ら学んで、自分の未来を開拓する
- ・ネットやコンピュータを使いこなして情報を集め、どれが信用できるかも自分で判断して活用する
- ・音楽の表現や鑑賞をもっと楽しみたいと思ったときに、自分で学びを深めることができる



音楽の授業

自分で調べて学ぶ

- ・楽器の演奏からDTMまで、扱い方のコツを生徒が自らインターネットでも調べて学習する
- ・生徒同士で教え合うことや、気づいたことをオンライン上で共有することでも、学びを深める

自分で考えて選ぶ

- ・難易度に幅のある課題を設け、生徒一人ひとりがどのレベルを目指すか考え、練習することを選ぶ
- ・例題曲を用意しつつ、楽曲を探していただくことも歓迎し、おのおのが自分で取り組みたい曲を選ぶ

他の教育活動や社会とのつながり

- ・「自ら考え、自ら選び、自ら学ぶ」ことを、生徒による時間割作成をはじめ、学校の教育活動全体で推進
- ・ICT活用のスキルや、情報を集めて真偽を見きわめて活用するリテラシーを、教科の枠を越えて育むことを志向中